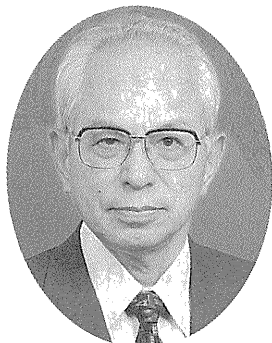


ずいそう



複式簿記のバランス思考

谷 富 一 昭

私が、かつて、前の会社で経理事務をしていた頃、少しばかり簿記の勉強をしたことがありました。

30年も前のことですが、営業から経理へ配転を命じられたとき、予想もしない分野だったことと、ソロバン技術が特に苦手な私でしたから、3カ月位は仕事をする気にもなれずブラブラと過ごしていました。

しかし、いつまでも仕事をしないわけにもいかず、ここからすぐに脱出できるわけでもありませんので、ちょっと簿記でも勉強してみようか、借方・貸方って一体何のことなんだ、というところで手をつけ始めたわけです。

いくらか解りかけた頃でしょうか、とても大きな衝撃といいますか、感動に襲われたことを覚えています。

複式簿記では、日常発生する取引や現象を数字化して借方（左側）と貸方（右側）に分けて表示しますが、日常取引はもちろんのこと、そうでないどんな複雑な事象でも、複式簿記の手法で数字化していくと、もつれた糸がほどけるように、右と左に仕訳され結論が導かれることが解ってきたのです。

ほんとに不思議なことだと思いました。

そして、それらの数字は自らの意思でもあるかのように、貸借対照表と損益計算書の決められた棚に納まっていくのです。

一年間この数字が積み上がってくると、その期間の成績を正確に教えてくれます。

当たり前といえば当たり前のことですが、誰がこんな仕組みを考え出したのでしょうか。

簿記のある本に「ゲーテは『複式簿記は人類が考え出した最高の芸術のひとつである』と言った」という一文を読んだ記憶があります。

ゲーテ（1749～1832）の脳細胞をして、この仕組みは芸術であると言わしめたのです。

普通の簿記は、家計簿のように、お金の収入と支出を記録していく垂直的な思考だと思いますが、これに対して、複式簿記には貸借対照表というのがあって、ある一時点にあっては「資産

＝負債＋資本」であり、左右は必ず一致するという水平的思考が入ってまいります。

国・地方自治体には収入・支出の計算書はあっても貸借対照表がないということをよく聞きます。

国・地方合わせて借入金 は 666 兆円ともいわれていますが、貸借対照表がないということは、借入金（右側）は分かっているけれども、それに見合う資産（左側）が見えないということでありましょう。

民間の会社ですと、いくら借入金があっても、それに見合う健全な資産があれば財務状態は OK となります。

資産を売却すれば債権者にも株主にも迷惑をかけないからであります。反面、バランスが崩れてどうしても回復できないときは破局となりましょう。

「日本は、外国からは一銭も金を借りていないわけではない。だから大丈夫だ」

「日本は、他の国と違って 1,300 兆円の個人貯蓄を持っている。こんな国はどこにもない。大丈夫だ」などという話もよく聞きます。

バランス維持に必要な、借入金に対応する国の資産、あるいは地方自治体の資産とは一体何なんだろう。

簿記の頭は、ほんとにつまらないことを考えるのであります。

こんなことが頭の片隅にあるとき、先日、ジャーナリストの桜井よし子氏の講演を聞きました。

「1,300 兆円の皆さんの貯蓄は、もう殆んどなくなっていると考えたほうがいいのです」静かな語り口ですが、とても説得力がありました。もちろん、前後の話を聞かないと誤解しそうな一節ではあります。

国の資産と国民の資産が究極的には重なる（国の資産は国民の資産）ものとするならば、「資産＝負債（＋資本）」は「国民の貯蓄＝国・地方の借入金」の図式にもなるわけで、一瞬ドキッとしましたが、ここは人間の知恵とは偉大なもので、必ず絶妙のバランスを考え出していくことでしょう。

私たちの生活の中でも、大きくいえば人生の中にもバランスの世界はあると思います。

どんなに辛い（負）ことがあっても、反面にそれを支える強い心（正）があってバランスを保っていきます。幸せそうに見える人も、（正）ばかりではバランスが崩れるのであって、他人さまには分からない一面（負）が必ずあると思うのです。

これから国や地方のバランスは、どんな道程を歩んでその形を現すのか分かりませんが、国民の一人としての関心事ではあります。

今もって簿記には素人の私ですが、かつてこの世界に触れたときの感動が、折にふれ新鮮に蘇ってきます。